

授業素材としての「アーカイブズ展示」紹介 ―第1回〜第9回―

山本明史

一 アーカイブズウィークについて

筆者は先に、『山口県文書館研究紀要』第五一号において、第10回以降のアーカイブズ展示解説シートを授業で活用できる素材として紹介した⁽¹⁾。本稿はその続編で、ここでは、第1回から第9回までのアーカイブズウィークにおける資料展示を紹介する。

「中国四国地区アーカイブズウィーク」は、毎年六月の第一週を中心に、アーカイブズの重要性とその保存利用をPRするため、中国四国地区の文書館・公文書館施設等が共同して実施している事業である。当館では、これを普及事業の柱に位置づけ文書館の活動と館蔵資料を紹介してきた。令和六年度現在、その回数は一九回を数え、県民の方々からも、文書館の恒例行事として認識していただけるようになった感がある。

二 アーカイブズ展示

当館のアーカイブズウィークでは、毎回、時宜を得た親しみやすいテーマを設定し、テーマに即した資料展示を行っている（アーカイブズ展示）。第1回から第9回のテーマは以下のとおりである。

「山口県文書館の史料集刊行事業」〔備後山内氏と一豊をめぐる人々〕（第1回）、「街道を行く」〔山陽道・萩往還・赤間関街道・石州街道・山代街道〕（第2回）、「吉田松陰自賛肖像展」〔第3回〕、「天下人と毛利氏」〔戦国のアーカイブズ〕（第4回）、「長州藩幕末維新資料」〔第5回〕、「ポスター・写真・映像に見る昭和のやまぐち」〔昭和38年山口国体のころ〕（第6回）、「絵図と古文書で歩く萩往還」〔第7回〕、「山口県災害記」〔過去の記録に学ぶ〕（第8回）、「美術とアーカイブズ」〔古文書に見る防長の美術工芸品〕（第9回）。

前掲論文で紹介したように、第10回以降のアーカイブズ

ブズ展示では、テーマに関する館蔵資料を、館員が各自の得意分野を活かして掘り起こし、これを持ち寄り展示を行っている。このため、一つのテーマに対して、様々な観点から館蔵資料が紹介されるのが大きな特徴である。また、その展示の解説のための「アーカイブズ展示解説シート」を作成し、展示終了後には当館Webサイトで公開している。

これに対し、第1回から第9回までは、各回の展示の担当が、展示資料の選択をはじめ、構成の検討、解説資料の作成など、展示全体を統括した。このスタイルで行われたアーカイブズ展示では、各回の担当者の専門性や独自性が強く反映され、結果としてテーマを深く掘り下げたユニークな展示となった。

このように、初期のアーカイブズ展示と現行のそれとは、展示のスタイルに違いがある。前者が、数多くの話題を必要とする日々の授業での活用に適しているのに対し、後者は、例えば、「山口県では過去のどのような自然災害があったのか、地元に残る資料を集めてみよう」など、児童生徒が主体的に取り組む探究学習のテーマを設定する際の参考になると考える。

三 アーカイブズ展示一覧

後掲の表は、第1回から第9回までのアーカイブズ展示で紹介された資料および展示解説の一覧である。

各回の展示タイトル、開催年度、趣旨説明、項目、解説、資料名、請求番号を記した。教材化してみたい資料があれば、是非来館し、実際に資料を手にとっていただきたく思う。

なお、各回のアーカイブズウィークのイベント内容は当館Webサイトで紹介しているのでご参照いただきたい。^{1,2)}

註

(1) 拙稿「授業素材としての「アーカイブズ展示解説シート」紹介」『山口県文書館研究紀要』第五一号、令和六年。

(2) 過去のアーカイブズウィークの情報は当館のサイトに掲載している。

<https://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/events/archives-week/log/>

【アーカイブズ展示一覧】

- ・第1～第9回(平成18年度～平成26年度実施)のアーカイブズ展示を一覧表にした。
- ・展示タイトル、開催年、展示趣旨説明、展示項目、解説、資料名、資料請求番号を記した。

第11回 アーカイブズアイコン
(平成18年度)

【展示タイトル】
山口県文書館の史料集刊行事業

(展示趣旨説明)

山口県文書館は、開館翌年の昭和35年以降、『防長風土注進案』・『萩藩閩閩録』をはじめとする多くの史料集を刊行してきました。その総数は7種類、48冊におよびます。記録資料の活字化は、研究界に寄与するのみならず、それらの保存・利用に直結する重要な業務です。今回の展示では、これまでに刊行した各種史料集とその原本を展示し、当館の史料保存・活用に対する実績を紹介いたします。

| 項目 | 解説、資料名、請求番号 |
|-----------------------|--|
| 1 『防長風土注進案』 | <p>原本395冊。刊本名『防長風土注進案』。昭和35年～40年刊行。全22巻、別巻1。西日本文化賞受賞。暮末に萩藩が企画した『国郡史』編修のための資料として、藩内11郡17宰判の各町村から注進させた明細書。内容は、村名由来・山川の形勢・土地相・気候・田畠面積・石高・御蔵入給領の別・租税額・米蔵所在地・道路交通・創立山・河川橋梁・戸口および職業別人数・牛馬数・風俗概要・産業大概・物産・神社寺院・名所旧跡などで、いわば現在の町村政概要に相当します。統計的数値はほぼ天保13年(1842)のもので、江戸時代の防長を代表する総合地誌として、現在も広く利用される基本史料です。</p> <p>*風土注進案(県庁伝来旧藩記録 風土注進案1～395)</p> |
| 2 『萩藩閩閩録』 | <p>原本204冊。刊本名『萩藩閩閩録』。昭和41年～45年初版刊行。全5巻、別巻1。萩藩士永田政純が、藩主毛利吉元の命をうけて、藩内諸家所蔵の文書・宗譜をまとめたもの。中世～近世の政治・経済史研究に不可欠の史料集です。享保5年(1720)から同11年(1726)までの6ヶ年の歳月をわけて編さんされた。また、永田は、一点一点の文書に厳密な校訂を加えています。収録文書は、戦国～近世初期に集中し、芸備・防長を中心として、中国～北部九州の広い地域に関係しています。</p> <p>*閩閩録(県庁伝来旧藩記録 閩閩録1～204)</p> |
| 3 『防長寺社由来』 | <p>原本2017冊。刊本名『防長寺社由来』。昭和56年～60年刊行。全7巻。享保期以降、防長両国諸村の寺社から藩府絵図方に提出された由来書です。藤越・境内小社堂塔・棟札・寺社領・至物・古文書・詩歌・墓碑などが収録されており、江戸時代の防長各寺社の状況を調べる上で貴重な史料です。</p> <p>*寺社由来(県庁伝来旧藩記録 寺社由来1～2017)</p> |
| 4 『府県史料 山口県』全6巻 | <p>置県から明治17年までの県勢を政府に提出したものです。原本は国立公文書館内閣文庫、稿本64冊が当館所蔵です。</p> <p>*山口県史料(県庁職前A1734～1802)</p> |
| 5 『山口県史料』古代・中世・近世各編4巻 | <p>昭和47年～53年にかけて、当館で編さんした史料集です。現在は、県史編さん室において、『山口県史』(全42巻)が刊行中です。</p> |

| | |
|--|--|
| <p>第1回 テーカイブズウィーク 歴史講座スベシヤル特別展示</p> | <p>【展示タネル】 備後山内氏と一豊をめぐる人々</p> |
| <p>(特別展示について) 第1回「テーカイブズウィーク」では、(財)土佐山内家宝物資料館館長 渡部淳氏を講師として、「山内一豊とその妻～大河ドラマ「功名が辻」の世界～」と題する「歴史講座スベシヤル」が開催された。この特別展示は、これとタイアップして、講座当日、当館所蔵の山内家関係文書を紹介したものである。</p> | |
| <p>項目</p> | <p>解説、資料名、請求番号</p> |
| <p>(テーマ1) 備後山内氏</p> | <p>山内一豊が信長や秀吉の下で功名を立てるべく励んでいた頃、備後国(現広島県)では一豊と祖先を同じくする山内氏が勢力を伸ばしていました。この山内氏は、後に毛利氏に属します。テーマ1では、備後で活躍した山内音藤氏の文書を紹介いたします。 *山内氏系図(図書270/088)(大日本古文書 家わけ第15巻、關東下知状 承久3年(1221)7月26日(複写資料143)、山内一豊一豊架状 貞和初7年(1351)10月2日(複写資料143)</p> |
| <p>(テーマ2) 一豊をめぐる人々</p> | <p>戦国時代真っ只中を駆け抜けた一豊。その生涯には多くの戦国武将との関わりがありました。テーマ2では、一豊と関係のあった人々の書状を紹介します。 *織田信長朱印状(年未詳) 11月26日(複写資料142)、羽柴秀吉書状(天正10年(1582)) 卯月19日(村上家文書272)、足利義昭御内書(天正4年(1576)) 7月13日(複写資料145)、黒田孝高書状(天正14年(1586)分) 11月10日(宗古屋家文書41)、黒田長政書状(年未詳)11月27日(毛利家文書3他家22)、福島正則書状(年未詳) 9月5日(村上家文書282)、加藤清正書状(年未詳)卯月28日(複写資料275(2))、池田輝政書状(年未詳) 9月7日(毛利家文庫3他家26)、山内忠義書状(正保3年(1646)方) 7月13日(毛利家文庫3他家178)</p> |
| <p>第2回 テーカイブズウィーク (平成19年度)</p> | <p>【展示タネル】 街道を行く ～山陽道・菟住還・赤間関街道・石州街道・山代街道～</p> |
| <p>(展示趣旨説明) 江戸時代、防長両国には、菟住還、山陽道、石州街道などたくさんの街道があり、人・モノ・情報が行き交っていました。それら街道の中には、現在、すでに忘れ去られ、消えつつあるルートがある一方、国道や県道に姿を変え、今も交通の大動脈として生き続けているルート、その存在に新たな価値が見出され、地域の文化財として活用されているルートもあります。今年の「テーカイブズウィーク」は、街道、特に江戸時代の街道にスポットをあて、文書館が所蔵する文書記録のなかから、街道関係のものを紹介します。</p> | |

| 項目 | 解説、資料名、請求番号 |
|-------------------------|---|
| 1 街道 ～江戸時代と今～ | <p>江戸時代、防長両国にはどんな街道があったのでしょうか？ルートは今の道路とどう違っているのでしょうか？江戸時代の絵図と、近年果が作成した道路図を比べてみました。江戸時代と今、見比べてみてください。</p> <p>*防長全図(毛利家文庫56絵図248、山口県管内道路図(行政資料)地図平成13-4)、大道小道并渡道舟道之楳(毛利家文庫56絵図288)</p> |
| 2 街道の風景 ～一里山・道松・町並み～ | <p>江戸時代、街道沿いには道松が整備され、約1里ごとには一里山(一里塚)が設置されていました。また、街道沿いの町場では、農村とは違った町並みを見ることができました。かつての街道とその周辺の風景。文書館が所蔵する文書や絵図、古写真などからイメージしてみてください。</p> <p>*道松絵図(小部幸判道松絵図(栗平伝日藩記録889-3)、島島幸判横坂沖ヨリ玉江坂迄道松絵図(同889-8)、山口幸判道松絵図(同889-5)、山代幸判道松付取帳(同851)、一里山)牟礼村(地下上申389)、福井上村(嵐土注進案369)、巡見使記録(栗平伝日藩記録870～872)、(町並み)鹿野市井町町割図(岩崎家文書45)</p> |
| 3 御国廻り ～原様が村をまわる～ | <p>「御国廻り」とは、藩主による領内巡見のことです。萩藩主は、萩から時計回りに、20日ほどの巡見の旅を行いました。御国廻りは、藩主のみならず、藩士たちや街道沿いの人々にとって一大イベントであり、藩庁や藩主を迎えた村の庄屋の元には、多くの記録が残されました。そのいくつかを紹介いたします。</p> <p>*宗広公御国廻り(毛利家文庫6巡見22)、宗広公御国廻記(徳山毛利家文庫 廻国記11)、吉就公初入国御国廻り一巻(毛利家文庫6巡見2)、(村役人が残した御国廻りの記録)御廻国二付諸事覚帳(谷口家(岩国市)文書87)</p> |
| 4 みんなが旅する♪ | <p>江戸時代、多くの人々が、旅に出かけるようになりました。経済的発展や交通の整備などを背景に、寺社や名所旧跡を巡る観光目的の旅が、安全に手懸けできるようになったからです。文書館には、江戸時代、防長両国の人々が各地へ旅した記録がたくさん残っています。それらから、人々がどんな旅を、何を見て、何を感じたのかを知ることができます。</p> <p>*往來手形(金津家(山口市)文書90)、(旅行図書)〔御原家(岩国市)文書45〕、(旅の卜方)〔小田家(柳井市金屋)文書898-899、安部家(山口市)文書528-535、539〕、(旅先で病気になる)〔金子家(山口市)文書219、(旅の卜方)〔小田家(柳井市和田)文書87-1)、新増日本道中行禮記(安部家(山口市)文書1456)、(名所図)〔安部家(山口市)文書1423-1432)〕</p> |
| 5 県教委「歴史の道調査」 | <p>山口県教育委員会では、昭和55年以降、5回にわたり、歴史の道調査を実施しました。街道とその周辺文化財に関する総合的な調査事業です。その成果は「歴史の道調査報告書」として刊行されています。調査データはすべて文書館へ移管されています。</p> <p>*歴史の道調査報告書 萩往還』昭和55年/約53km、〔同 山陽道』昭和56～57年/約156km、〔同 赤間関街道』平成5～7年/約220km、〔同 山代街道』平成12～13年/約100km、〔同 石州街道』平成14～16年/約239km</p> |
| 6 絵ハガキにみる街道と景観 | <p>当館所蔵の諸家文書には、大正～昭和戦前期の絵ハガキが数多く残っています。その中には、街道と周辺の景観が写っているものがあり、貴重な史料となっています。</p> <p>*〔山口〕本町廻り/萩往還・石州街道(内藤家文書576)、鶴石構重石/萩往還(圖書726-58-57)、大内築山庵/萩往還(同726-58-20)、歩兵四十二連隊全營/石州街道(同726-58-41)、(小部)黄澤権/山陽道(同726-68-327)、〔防府〕三田所澤/萩往還(時間家文書83)、船橋/萩往還(佐波川)圖書726-68-32)、(総)橋本の文庫/萩往還(時間家文書85)、〔須佐〕長門須佐藩/弘坂道(月輪寺文書12)、〔下関]連の清古戦場/山陽道(圖書726-58-204)、〔鹿野]國防廳野邊瀧陣守の全景/山代街道(内藤家文書577)、〔津和野]石見津和野陣守ノ景/石州街道(月輪寺文書212)</p> |

| | |
|--|---|
| <p>行程記</p> | <p>萩から江戸までの街道を描いた絵図です。山陽道、東海道、中山道ほか全25帖で構成されています。街道を画面の中心に据え、沿線の建物や自然景観が色鮮やかに描かれています。構図は、街道を挟んだ上下向きあわせで、往復路両用に仕立ててあります。 *行程記(毛利家文庫30地誌41)</p> |
| <p>御国廻御行程記</p> | <p>萩藩主の御国廻り(領国巡視)の道勝を描いた絵図です。6代藩主毛利宗広の御国廻りの時に、萩藩絵図方有馬喜惣太らが作製したものです。萩唐通札場を起点に、防長の外周を一周するルートです。街道を画面の中心に描き、沿線の建物や自然景観が色鮮やかに描かれています。行程記が往復両用であるのに対して、常に左方向にスクロールする形です。沿線の寺社の由来を記した「寺社日記」7巻がセプトになっています。 *御国廻御行程記(毛利家文庫30地誌57)</p> |
| <p>第3回 アーカイブズツアー (平成20年度)</p> | <p>【展示タイトル】 吉田松陰自賛肖像展</p> |
| <p>(展示趣旨説明) 平成19年度、当館では、昭和29年に吉田家から寄贈を受けた吉田松陰関係資料754点のうち、「吉田松陰自賛肖像」・「総筆」・「松下村塾記」の修復を、(財)住友財団の助成を受けて実施しました。今回のツアーでは、この修復を記念して、修復後、初公開します。</p> | |
| <p>項目</p> | <p>解説、資料名、請求番号</p> |
| <p>1 像 絹本着色吉田松陰</p> | <p>安政6年(1859)5月21日、松浦松洞筆、諸本の中では唯一の胡座像であり、羽織を纏わず、股差を左脇に置き、右手で書物の頁をめぐる。紺色の着物が画面に締まりを与え、賛文の整然さと相映ってバランスの良い自賛肖像となっている。「顔やや長く、隆準(高い鼻柱)にして、白面に痘痕(あざ)を帯ぶ。一見威風の人を襲ふものなし。ただ眼光の爛々として他を射るのみ」(広瀬豊著「吉田松陰の研究」)と評される松陰の容姿を上く表している。賛・跋は明掲のとおりである。賛文の末尾が「人宜立志兮聖賢敢追陪」とあるのは本図のみで、他本はすべて「古人輝と兮聖賢敢追陪」となっている。本図と萩松陰神社本の跋文は、特定の人物を対象とせず、「諸友」に宛てた内容となっている。本図と萩松陰神社本の2幅のみが絹本であり、他はすべて紙本である。なお、本図の完成日を記した資料は確認できなかったが、内容からみて萩松陰神社本とほぼ同時と考えられる。賛・跋の筆致、肖像の配置など作品全体のバランスも良く、萩松陰神社本と並ぶ吉田松陰自賛自像の秀作である。 ちなみに、松陰が使用した印は4種6種である。このうち、小さめの「日夕佳」・「矩方」・「吉田矩方」・「子義氏」の4種(画面篆刻のため2種)は、山鹿流兵学を松陰に伝授した林百非が刻して与えたものである。自賛・跋に捺した印の組み合わせは2通りある。関防印に大き目の「日夕佳」、落款に「吉田矩方」・「子義氏」を用いた場合と、関防印に小さめの「日夕佳」と落款に「矩方」の場合で、本図と萩松陰神社本は、前者である。 *絹本着色吉田松陰像(自賛)【吉田家本】(吉田松陰関係資料164)</p> |
| <p>2 松下村塾記</p> | <p>安政3年(1856)9月5日。土屋蕭海批評。松下村塾は、叔父の玉木文之進が創設し、親族の久保五郎左衛門、そして松陰へと引き継がれる。本書は、その久保の命によって記したもので、松陰の教育に対する高い理念と抱負が雄渾な文章でつづられている。友人士屋蕭海による朱筆の批評が加えられている。 *松下村塾記(吉田松陰関係資料94)</p> |

| | |
|------|--|
| 3 絶筆 | 安政6年(1859)10月27日。安政6年10月27日、松陰は江戸伝馬町の刑場で処刑された。呼び出しの声を聞いて、懐紙に最期の一首を書いたもの。「此程に思定めし 出立ハけふきくこそ 嬉しかりける。第4句の字数が足りないことに気づいたが、推敲する間がなへ、「く」の側に「し」をうつったまま筆を置かざるを得なかった。 *絶筆(吉田松陰関係資料171) |
|------|--|

| | |
|---------------------------|--|
| 第4回 アーカイブズツアー (平成21年度) | 【展示タイトル】 天下人と毛利氏 ~戦国のアーカイブズ~ |
|---------------------------|--|

(展示趣旨説明)
 毛利氏は、もともと安芸国(現広島県)の国人領主でしたが、毛利元就の時に急速に勢力を拡大し、中国地方の覇者へと成長します。その孫、毛利輝元が毛利氏の主となると、天下統一を目指す織田信長と対立、激しい戦いを繰り広げていきます。信長の急死により、存亡の危機を脱すると、信長の後継者争いを勝ち抜いた豊臣秀吉の全国統一を支える存在となりました。友好関係にあった秀吉の死は、やがて毛利家に大きな影響を及ぼします。豊臣政権の内部にあって秀吉の遺児・豊臣秀頼を支え続けるか、それとも実力者・徳川家康との関係を重視するか…。豊藤を内に秘めつつ、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いを迎えた毛利氏。結局、美濃国(現岐阜県)での戦いで西軍(豊臣方)が敗北し、総大将であった毛利氏はその所領を大きく削られ、周防国・長門国の2ヶ国を領する大名として、江戸時代を生き抜くことになりました。この周防国と長門国が、現在の山口県であることはいまもありません。
 今回の展示では、山口県の原形を築いた毛利氏と、戦国乱世を鎮めた天下人たる信長・秀吉・家康との関係にスポットを当て、その関係を物語る館蔵資料を紹介します。

| 項目 | 解説、資料名、請求番号 |
|-----------------------|--|
| 1 信長 ~「天下布武」 との対決~ | 村上武吉から鷹を贈られたことへの信長の返礼です。「天下布武」の印判が使われています。信長は、永禄10年(1567)、美濃国(現岐阜県)を手に入れた頃よりの印判を使います。天下の統一を意識したためと言われています。 *織田信長朱印状(村上天家文書5) |
| ①織田信長朱印状 | 信長が花押(サイン)を据えている文書です。毛利元就と輝元に対して、端午の祝儀を贈られたお礼を述べています。当時、信長は近畿地方で四方に敵を迎えている状況で、毛利氏と友好関係を築き、信長と敵対する勢力を攻撃しようとしたのかもしれません。 *織田信長書状(沢戸家文書2) |
| ②織田信長書状 | 毛利氏の水軍が石山本願寺へ支援物資を搬入する際、それを阻止しようとした信長の水軍を打ち破った第一次木津川口の戦いで、の働きに感謝した文書です。この戦いは毛利氏の大勝利に終わりました。 *小早川隆景書状(村上天家文書6) |
| ③小早川隆景書状 | 毛利氏の水軍が石山本願寺へ支援物資を搬入する際、それを阻止しようとした信長の水軍を打ち破った第一次木津川口の戦いで、の働きに感謝した文書です。この戦いは毛利氏の大勝利に終わりました。 *小早川隆景書状(村上天家文書6) |
| ④毛利輝元書状 | 尼子勝久らが信長の支援を受けて籠城する播磨国(現兵庫県)上月城を、毛利氏の軍勢が包囲しました。信長の嫡子・信忠らが救援に駆けつけたため、毛利氏も緊要している様子が見受けられます。 *毛利輝元書状(冷泉家文書3) |

| | |
|--------------|---|
| ⑤毛利輝元書状 | <p>上月城の援軍に来ていた信長軍との戦闘にも勝利し、上月城攻めも終盤を迎えています。輝元も城攻めは決着がつくとの見通しを立てています。実際、7月3日には開城となりました。</p> <p>*毛利輝元書状 (林潤介文書74)</p> <p>備前国(現岡山県)の戦国大名・宇喜多直家が毛利氏から離反し、信長に服属してしまいました。周辺の諸氏にも動搖が走ります。</p> <p>*毛利輝元書状 (山内家文書甲巻11)</p> |
| ⑥毛利輝元書状 | <p>秀吉が村上元吉に宛てた書状です。秀吉の軍が高松城周辺の城を包囲していること、援軍に駆けつけた小早川隆景に小競り合いを仕掛けても隆景は応じていないことを報じ、秀吉優位を強調して、元吉に織田方へ味方するよう働きかけようとしています。</p> <p>*羽柴秀吉書状 (村上家文書273)</p> |
| ⑦羽柴秀吉書状 | <p>高松城近くの鴨山城に内応者が出たものの、残る守備隊が善戦して秀吉軍を撃退したことを伝えています。また、毛利輝元・吉川元春ら後継の援軍も到着、高松城救援態勢が整ったことも知らせ、毛利軍の優勢を述べています。</p> <p>*小早川隆景書状 (冷泉家文書2)</p> |
| ⑧小早川隆景書状 | <p>村上氏が信長らの誘いに応じず毛利氏に協力してくれたことへの感謝状です。秀吉との講和、また風聞ながら京都で信長父子が自害したことにも触れています。文中、「不慮吉事此事候とあります。信長の死により、毛利氏の滅亡が回避され、輝元の勝をなでおろす様子が伝わってきます。</p> <p>*毛利輝元書状 (村上家文書8)</p> |
| ⑨毛利輝元書状 | <p>毛利氏と秀吉が講和する際に、毛利氏側の使者として京都に上っていた安国寺恵瓊と林就長が、佐世元嘉に宛てた書状の写。双方の講和条件、特に境界を巡って意見の違いが生じ、交渉が難航しています。二人は秀吉の案を呑むことで、残りの地域が領有できるとの見通しを示しています。</p> <p>*安国寺恵瓊・林就長書状 (毛利家文庫3公統236)</p> |
| ⑩安国寺恵瓊・林就長書状 | <p>秀吉と講和折衝に赴いた林就長の書状です。国元での騒がずみな行動を慎み、秀吉の提示案に従いつつ、毛利氏の所領を守ろうとする林の主張が窺えます</p> <p>*就長書状 (毛利家文庫 遠用物近世前期1041)</p> |
| ⑪就長書状 | <p>秀吉による四国攻めに従い、小早川隆景も毛利氏の軍勢も出兵準備に入ります。冷泉氏はこの直前まで秀吉の紀州攻めに従っていたのですが、再び出兵を命じられています。</p> <p>*小早川隆景書状 (冷泉家文書4)</p> |
| ⑫小早川隆景書 | <p>九州・島津攻めの詳細を報じています。黒田孝高の指揮のもと、毛利氏をはじめとする秀吉軍が九州への上陸準備をしています。</p> <p>*吉川元春書状 (岡川毛利家文書1)</p> |
| ⑬吉川元春書状 | <p>九州・島津攻めの詳細を報じています。黒田孝高の指揮のもと、毛利氏をはじめとする秀吉軍が九州への上陸準備をしています。</p> <p>*吉川元春書状 (岡川毛利家文書1)</p> |

| | |
|---|--|
| <p>⑭豊臣秀吉朱印状</p> | <p>鳥津氏を降伏させた秀吉は、筑前国・筑後国(明福岡県)にある不要な城を壊し、博多の復興を指示するなど、九州の安定に力を注ぎます。それには毛利氏の協力が不可欠で、秀吉が輝元と面会の上で指示を出すと伝えています。 *豊臣秀吉朱印状 (中村家文書19)</p> |
| <p>⑮毛利輝元書状</p> | <p>「関白殿」(秀吉)が、三月一日に小田原・北条氏を攻めるため出陣する旨、全国の諸大名に通知したことを報じています。この戦いにおいて毛利氏は、水軍の出兵が求められたようです。輝元は、水軍の将・冷泉元綱に出陣の準備を指示しています。 *毛利輝元書状 (冷泉家文書1)</p> |
| <p>⑯起請文前書写</p> | <p>秀吉が病に倒れたことから、諸大名は、秀頼に忠節を尽くすことは勿論、豊臣政権の指示に従うことを誓っています。この約一ヶ月後の八月十八日、秀吉は歿するのです。 *起請文前書写(山田家文書181)</p> |
| <p>3 家康 ～ 朕殿から近世大名へ～</p> <p>⑰豊臣家五大老連署状写</p> | <p>朝鮮出兵の折に奮戦した鳥津氏に対する褒賞です。戦場に赴き功績のあった鳥津義弘・家久父子に褒美が与えられています。差出人の中で、五大老のひとりである輝元の名が見えます。 *豊臣家五大老連署状写(松村家文書25)</p> |
| <p>⑱毛利輝元起請文控</p> | <p>輝元が家康に対してしたためた起請文です。家康が秀頼を粗略に扱わない意志を表したことを喜び、今後は「父兄」のような親しい交わりを願い、秀頼を支えていくことを確認し合いました。なお、慶長4年の閏月には3月にありますので、「閏六月」は写し間違いと見られます。 *毛利輝元起請文控(毛利家文庫 遠用物中世394)</p> |
| <p>⑲黒田長政・福島正則起請文写</p> | <p>東軍に属した黒田長政・福島正則が、吉川広家・福原広俊に送った起請文です。広家と広俊は、家康への敵対心が毛利氏にないことを訴えています。家康に敵意がないこと、広家・広俊らの思いを家康が高く評価していることなどを伝えています。 *黒田長政・福島正則起請文写(毛利家文庫 遠用物近世前期1080)</p> |
| <p>⑳徳川家康起請文写</p> | <p>関ヶ原の戦いの後、西軍の総大将であった毛利氏は大幅に所領を減ぜられ、周防国・長門国の二ヶ国が与えられます。輝元・秀敏の生命の保障も盛り込まれているところに、戦争直後の謙さが表れています。 *徳川家康起請文写(毛利家文庫 遠用物近世前期522)</p> |
| <p>㉑福島正則書状</p> | <p>毛利氏に代わって、備後国・安芸国(現広島県)を与えられたのが福島正則です。正則の依頼に、毛利氏側が確たる返答をしないことと苛立ちを示しています。「関ヶ原の戦い後、輝元が許されるよう家康に働きかけたことを忘れたのか」という言葉に、正則の強い不信感が表れています。 *福島正則書状(毛利家文庫 遠用物近世前期1194)</p> |

| | |
|---|---|
| <p>◎吉川広家・福原広俊運書状型</p> | <p>前出21への返答です。毛利氏が現政難のため、諸税を前納させて持ち去ってしまったことへの釈明と理解を求めています。所領を三分の一に減らされた毛利氏の苦悩が窺えます *吉川広家・福原広俊運書状型(毛利家文庫 遠用物近世前期1195)</p> |
| <p>◎本多正純書状</p> | <p>大坂城を攻めるため、家康が名古屋に着いたことを報じています。また、秀頼の家老である大野治長らが騒ぎを起こす一方、秀頼の守り役だった片桐且元は大坂城を退治した模様です。大坂周辺の混乱の様子が伝わります。 *本多正純書状(毛利家文庫第5分冊11軍事3)</p> |
| <p>◎江戸幕府加判衆運書奉書</p> | <p>将軍が伏見に到着しました。大坂城攻撃に余念がなく、秀就へも連やカニに大坂城攻撃軍に加わるように、との幕府からの指令です。 *江戸幕府加判衆運書奉書(毛利家文庫第5分冊2幕府6)</p> |
| <p>◎毛利宗瑞(輝元)書状</p> | <p>大坂城落城について触れた書状です。実際には(八日に秀頼は自刃しているのですが、なぜか一日早い七日の落城となっているようです。冒頭に「大坂御城」とあって、大坂城に「御」の文字が付けられています。最期まで、大坂城や秀頼は敬うべき存在であったことがわかります。 *毛利宗瑞(輝元)書状(今川家文書11)</p> |
| <p>(第2展示会場) 「関ヶ原を戦った武士(もののみ)」編</p> | <p>「天下分け目」と言われる関ヶ原の戦いとは、慶長6年(1600)9月15日、美濃国関ヶ原(現岐阜県)において、徳川家康率いる東軍と、石田三成ら西軍が繰り広げた戦いです。戦開が膠着状態に陥っていたところ、西軍に属する小早川秀秋らが東軍に寝返ったため、西軍は壊滅、家康の勝利に終わりました。 しかし、この関ヶ原での戦いの以下、「本戦」と称します)の勝利のみが家康に天下の覇権を握らせたわけではありません。政治的駆け引きや、内応工作などの「事前準備」、さらには、西軍が展開した畿内周辺での東軍勢力の駆逐戦や、東北や九州などで展開された局地戦を併せ見ることによって、関ヶ原の戦いの全貌が把握でき、さらにこの戦いが後の世に与えた影響やその意義が考えられるのです。第2展示会場は、特別イベントプログラムに合わせて、関ヶ原の戦いについて死闘を繰り広げた武将たちを紹介しています。 【加藤清正】加藤清正書状(右田毛利家文書8)【2筑紫広門】筑紫広門書状(右田毛利家文書8)【3毛利吉成】毛利吉成書状(右田毛利家文書8)【4島津義弘】島津義弘書状(右田毛利家文書8)【5小西行長】小西行長書状(右田毛利家文書8)【6高橋主膳正】高橋主膳正書状(右田毛利家文書8)【7宗吉】宗吉書状(右田毛利家文書8)【8毛利吉成】毛利吉成書状(右田毛利家文書8)【9黒田長政】黒田長政書状(右田毛利家文書8)【10脇坂安治】脇坂安治書状(右田毛利家文書8)【11豊臣秀吉】豊臣秀吉朱印状(右田毛利家文書8)【12長束正家・増田長盛・石田三成・前田玄以】豊臣氏奉行人連署副状(右田毛利家文書8)【13池田輝政】池田輝政書状(毛利家文庫第5分冊正則)【福島正則書状(村上天孝)】福島正則書状(右田毛利家文書8)【14藤堂高虎】藤堂高虎書状(右田毛利家文書8)【15蜂須賀至鎮】蜂須賀至鎮書状(毛利家文庫第5分冊3他家195)【16稲島正則】稲島正則書状(右田毛利家文書8)【17有馬重氏】有馬重氏書状(毛利家文庫3他家69)【18鍋島勝茂】鍋島勝茂書状(毛利家文庫遠用物近世2649)【19黒田孝高】黒田孝高書状(毛利家文書41)【20伊達政宗】伊達政宗書状(戸家文書3)【21毛利秀元】毛利秀元書状(毛利家文庫第5分冊6式家1)【22吉川広家】吉川広家書状(毛利家文庫第5分冊6末家52)【23安国寺惠瓊】安国寺惠瓊書状(右田毛利家文書14)【宗瑞様へ広家申上書物之号(毛利家文庫 遠用物近世前期2286)</p> |
| <p>◎山口県文書館開館50周年にあたる平成21年度は、「アーカイブズ展示」として以下の特別展示を行った。</p> | <p>山口県文書館50年の歴史をパネルで紹介(5月1日～6月28日、10月31日～12月27日)。 あゆみ展</p> |

| | |
|---|--|
| <p>国指定重要文化財 大内版法華経板木展</p> | <p>大内文化の貴重な遺品、法華経板木59枚を公開(10月31日～12月27日)。</p> |
| <p>特別アーカイブズ展示</p> | <p>吉田松陰没後150年を記念し、「自賛肖像」と「絶筆」を特別公開(10月24日～11月1日)。</p> |
| <p>幕末維新アーカイブズ展</p> | <p>館蔵の幕末維新関係資料を紹介(10月31日～12月27日)。</p> |
| <p>《シリーズ》 アーカイブズを守る</p> | <p>年間を通じ、大内時代から現代まで、6つのテーマで、山口県の文書保存の歴史を紹介。 ①「山口殿中文庫～大内氏と文書保存～」②「救藩の文書管理～勝手に棄てるな～」③「1166冊の日記～徳山藩御蔵本日記～」④「絵図を作った男たち～救藩絵図方の挑戦～」⑤「焼け焦げた文書を救え！」⑥「市町村合併と公文書保存～文書館所蔵市町村合併関係文書の紹介～」</p> |
| <p>第5回 アーカイブズイブニング (平成22年度)</p> | <p>【展示タイトル】 長州藩幕末維新資料</p> |
| <p>(展示趣旨説明) 近年の幕末維新史に対する興味や関心の高まりを受けて、館蔵の長州藩幕末維新関係資料の中から写真資料を中心に展示します。この機会に、実物の幕末維新関係資料が持つ迫力に接していただき、アーカイブズ保存の重要性について理解を深めていただければ幸いです。</p> | <p>解説、資料名、請求番号</p> |
| <p>1 幕末維新期の古写真</p> | <p>今回のアーカイブズ展「長州藩幕末維新資料」では、幕末維新时期に撮影された古写真を展示しています。特に、3点のオランダ板(野村燁写真真)「井筒屋栄助(燁)写真真」「榎武隊士写真真」は、貴重な遺品で、その鮮明な画像には、目を見張るものがあります。 *救済天守閣写真真(吉田博堂文庫2706)、毛利元徳写真真(御原家文庫220)、伊達藩文写真真(吉富家文庫149)、井上馨・杉孫七郎写真真(吉富家文庫149)、山県有朋写真真(吉富家文庫158)、青木研輔写真真(日野家文庫128)、三条愛蔵写真真(日野家文庫147)、野村燁写真真(オランダ板)「日野家文庫30」、榎武隊士写真真(日野家文庫131)、井筒屋栄助(燁)写真真(オランダ板)「日野家文庫132」、岡布政之助写真真(吉富家文庫154)、岩倉使節回写真真(毛利家文庫81写真史料97)、大村益次郎肖像写真真(大村家文庫91)</p> |
| <p>2 大村益次郎筆写オランダ語辞書</p> | <p>オランダ語辞書「ゾーワ・ハルマ」の大村益次郎自筆とされる筆写本。大村は、オランダ語に加えて英語・数学なども熱心に学んだが、その勉強の一端を物語る資料である。大村は兵書の翻訳に積極的に取り組み、元治元年(1864)にオランダの戦術書を翻訳した「活版 兵家須知戦術附門」全6巻(明倫館蔵版、元治元年春、大村家文書69 長門陸軍学校版、元治元年秋、同68)は、長州藩の軍学講義に使用された。 *大村益次郎筆写オランダ語辞書(大村家文書76)</p> |

| | |
|------------|--|
| 3 西洋歩兵論 | <p>西洋歩兵の得失について議論される中、吉田松陰が、自らの意見をまとめたもの。『孫子』の「兵以正合、以奇勝」にふれ、「正」は西洋歩兵ノ節制ヲムルニ如カス、奇ハ本邦固有ノ短兵接戦ヲ用ユルニ如カス」としている。当時、長州藩が海防職戦として編制していた和流兵法による「神器陣」を批判し、西洋式に倣い、精練された歩兵を軸とする正兵を備えらるとともに、短兵接戦をもって敵にあたる精悍剛毅の者を集めた奇兵を備える必要性を主張した。のち文久3年(1863)6月、高杉晋作が結成した奇兵隊の理論的根拠を見ることが出来る。定本版『吉田松陰全集』第4巻所収。</p> <p>*西洋歩兵論(岡布家文庫1044)</p> |
| 4 辛亥江戸遊学日記 | <p>嘉永4年(1831)4月、吉田松陰は初めて江戸に出て、勉強修行に励んだ。江戸での動静が、こまめに記されている。原表紙は「なく、標題は吉田庫三によるもの。末尾に高杉晋作の自筆で「此先生辛亥東都着後之日記 先生邸二抵四月五日也 因是可知、門人高杉晋作蘭丁と書き込まれている。江戸では安原良齋、山鹿素水、佐久間象山らに促字し、知見を深めた。土屋謙海の紹介で儒者鳥山新三郎と出会い、鳥山塾で長州の土屋、米原良齋、中村百合庵、熊本藩の宮部鼎蔵などと時事を論じた。この年12月、藩からの過書手形交付を待たずに宮部らと東北遊歴に出発し、帰国後、罪に問われることとなった。定本版『吉田松陰全集』第7巻所収。</p> <p>*辛亥江戸遊学日記(嘉永4年5月朔日～12月6日)(吉田松陰關係資料36)</p> |
| 5 高杉晋作書状 | <p>本書は、安政6年(1859)11月、萩の高杉が、江戸の周布政之助に宛てたもの。同年10月27日に処刑された吉田松陰について、「我師松陰之言、遂二幕史之手ニカケ候之由、防長取滞口外仕候モ汗顔之至ニ御座候、美二私共モ師弟之父子船に候程之事故、仇ヲ親才候フハ安心不仕候、然処有父有吾身如吾身而非我身候故、自然致方無細座、唯日夜慕我師之影、激歎仕耳ニ御座候、自是人屈而益盛之語ヲ字に、朝撃劍夕読書練磨赤心堅固筋骨、尽孝于父母、奉忠于君候得へ、乃我師之仇ヲ討候本領ニも相成候ヲハシ平ト愚案仕居候」と記している。</p> <p>*高杉晋作書状(岡布家文庫343)</p> |
| 6 遼東之以農古 | <p>村田清風(1783～1855)は、大津郡三隅村(現長門市)出身。父は長州藩士村田光賢、通称四郎左衛門。号は嘯雨。毛利斉房から敬慕で、5代の藩主に仕えた。藩政の中核にあり、財政整理、越前方の拡充などの天保改革を推進した。本書は、嘉永6年(1853)6月のペリ来航、同年7月のフナーチン長崎入港を「扶桑開国以来之大変也」とし、海防の必要性を強く提唱したもので、清風71歳の自筆本。清風は、海防策にも関心が高く、本書の「まかに」、「海防糸口」、「漁翁麻事」などの著作がある。なお、本書の標題は、中国の故事に拠ったもので、見聞が狭いため、世間におられなかったことを知らず、自分のとりで得意になったことのため。『村田清風全集』上巻所収。</p> <p>*遼東之以農古(一般郷土史料貴重1)</p> |
| 7 佐藤寛作手控 | <p>長州藩士佐藤寛作(1815～1900)が、民政関係の役職在任中に見聞した重要事項をまとめたもの。内容は、防長両国捨て高の変遷から公租の明細、郡村費の費論、百姓名字帯刀仕法など多岐にわたる。長州藩民政関係のマニュアルともいえるべき資料となっている。筆録された記事の年代は、嘉永4年(1831)から明治2年(1869)頃までと推定される。本書は、「佐藤寛作手控」にして刊行されている。寛作は、郡奉行所蔵者役、同御内用掛をはじめ、同本籍本役など郡奉行所関係の諸役を務め、明治に入り、豊前国企救郡代官、浜田県令、島根県令を務めたのち、官を辞して熊毛郡田布施村(現田布施町)に帰郷した。本書は、明治32年(1899)頃、毛利家編輯所員埴利彦が、史料調査で採集した際に借用したが、返却等の事情がはつきりないため、仮に毛利家文庫に入れ置かれたといえる。</p> <p>*佐藤寛作手控(毛利家文庫11政理156)</p> |

| | |
|---|--|
| <p>8 士規七則</p> | <p>士規七則は、安政2年(1855)、吉田松陰が、徒弟玉木彦介の元服に際して作ったもの。人間としてのあり方、武士としての生き方について7箇条にまとめられており、松陰の士道観がよく表れている。定本版『吉田松陰全集』第2巻所収。士規七則は、玉木彦介に与えた自註入りのもの(萩市松陰神社蔵)と大倉護助に与えたもの(安政5年、萩博物館保管)が知られているが、本書は、萩野時行(佐々木松樹)に書き与えたもので、奥書に「是余野山兼中田家家人、何以為規萩野時行來遊數日共論士道反復甚喜、及其圖別錄以為贈」と記されている。萩野は須佐益田家家臣で、松陰にその才能を認められていた。のち、家老留所家の儒者佐々木尚陽の養子となり、明倫館教授、山口師範学校教師を務めた。</p> <p>*士規七則(佐々木家文書)</p> |
| <p>第6回 アーカイブスツアー (平成23年度)</p> | <p>【展示タイトル】 ポスター・写真・映像に見る昭和のやまぐち ～昭和38年山口国体のころ～</p> |
| <p>(展示趣旨説明) 今秋開催される第66回国民体育大会「おいでませ！山口国体」・第111回全国障害者スポーツ大会「おいでませ！山口大会」にちなみ、昭和38年に本県で開催された山口国体前後の様子を館蔵のポスター・写真・映像で紹介いたします。</p> | <p>項目</p> <p>解説、資料名、講求番号</p> |
| <p>1 「新聞切り抜き帳」 に見る昭和38年山口国体 ～東京オリンピックを翌年に控えた記録ラジシユの大会～</p> | <p>平田寿美江氏作成の昭和38年山口国体に関するスクラップラジシユです。中学校1年時の作品で、中学生の目線から山口国体がいかにえられていきます。国体の準備から終了まで、新聞記事のほか、「県政やまぐち」の国体特集号や完成したばかりの陸上競技場のカーペット、国体来賓展のしおりなどがスクラップされており、バラエティーに富んだ内容になっています。</p> <p>昭和38年山口国体は東京オリンピックを翌年に控え、各競技とも熱戦が繰り広げられた結果、空前の新記録ラジシユの大会となりました。世界新記録3、世界タイ記録1、日本新記録33、日本タイ記録14、大会新記録に至っては204を数えました。山口県勢の活躍も目覚ましく、この切り抜き帳からも、新記録に包まれた大会だった様子が伝わってきます。</p> <p>*山口国体新聞記事切り抜き帳(平田豊彦文書52)</p> |
| <p>2 各種目別プログラム</p> | <p>山口国体での各種目別プログラムです。山口国体は夏季大会と秋季大会を合わせて、県内69会場・32種目の競技が行われました。各種目ごとの準備や大会運営は、会場の市町村が中心となって行いました。これらのプログラムも、会場の市町村および種目別協会との協議の上で作成されました。表紙の色遣いや文字のデザインなどから、国体が行われた当時の雰囲気伝わってきます。</p> <p>*プログラム(行政資料60各団-127)・陸上(同126)・水泳(同151)・ウエイトリフティング(同135)・相撲(同136)・馬術(同137)・卓球(同138)・体操(同128)・蹴球(同142)・ソフトボール(同146)・レスリング(同147)</p> |

| | |
|--|--|
| <p>3 国体入場券・参加章・パッチ</p> | <p>国体入場券は、当時、国体事務局広報部職員であった佐々木克己氏によりデザインされました。入場券の半券に記されている「赤席」の「赤い席」「青席」などの色表示は、スタンドでの席の区分に対応しています。第1次・第2次候補国体においても本番どおりの入場整理のシミュレーションがなされており、このことが大会当日の円滑な運営につながりました。国体参加章は、大会役員・競技役員、選手、監督等に交付されました。図案制作者は山口県の洋画家香月泰男氏で、中心に干支のウサギを配り、飛翔を表すトビや木、冬季大会を表現した雪の結晶があらわれ、ローマ数字で第18回大会の18の数字が入られています。報道関係者に交付されたプレスパスと「山口国体場の会」のパッチです。開会式では、4000羽の鳩が放たれましたが、国体場の会が、その飼育・調教の任にあたりました。</p> <p>*山口国体の各種入場券、通行証、役員引き替え券、パッチ(個人購)</p> |
| <p>4 大会各種運営資料</p> | <p>大会開催にあたって作成された各種資料です。国体事務局の組織は総務部、財務部、経理部、用度部、演技部、施設部、広報部、輸送部、宿泊接伴部、衛生部、警備部、交通部に分かれています。それぞれの担当部署で大会運営のための膨大な量の資料が作られました。その一つ一つが山口国体の姿を今に伝える資料となりました。今回の展示ではその一部を紹介しています。</p> <p>*山口国体選手団名簿(行政資料60各団-91)、第18回国民体育大会 大会旗(同113)、山口国体 ガイダンスブック(同103)、山口国体ハンドブック(同110)、Press Guide 第18回国体夏季大会(同74)、国体の章(平田豊彦文書8)、サービスのしおり 科教店編(60各団-116)、サービスのしおり 旅館編(同11)、交通のしおり 山口国体夏季大会(リ-ケット昭和38-14)、県民の教養委員会(同25)、第18回国民体育大会秋季大会 山口市宿泊交通案内(同12)</p> |
| <p>5 「国体へまごころ いっぱい、花いっぱい」 —健民運動の推進—</p> | <p>昭和38年山口国体において、多くの県民が関わった取り組みに「健民運動」がありました。これは国体を機に、県民一人ひとりが健康やかな心身を持ち、お互いが明るく豊かな生活を築くことを目標とした運動で、山口国体のモットーであった「げんきに、きれいに、しんせつに」の美意識活動でした。具体的には、①体育レクイエーション運動、②親切運動、③交通安全運動、④清掃美化運動、⑤花いっぱい運動、⑥郷土を知る運動の6つからなっていました。健民運動は学校教育の場において、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、それぞれで積極的取り組みられました。花いっぱい運動推進資料には、花の育て方や、花壇の作り方などが具体的に書かれています。また、昭和41年に発行された花いっぱい運動に関する資料からは、国体が終わった後も引き続き運動が行われ、県民の心の財産として受け継がれたことがわかります。</p> <p>*幼稚園において健民運動をどのように進めるか 第2集 指導事例編(行政資料60教育-1432)、小学校において健民運動をどのように進めるか 第2集 指導事例編(同1431)、中学校において健民運動をどのように進めるか 第2集 指導事例編(同1437)、高等学校において健民運動をどのように進めるか 第2集 指導事例編(同1437)。花いっぱい運動推進資料(同60教育-1428-1429-リ-ケット昭和38-16)、花いっぱい運動推進計画「岩国市」(同60市町-1517)、第18回国民体育大会 徳山会場写真集(同60各団-156)、花いっぱい(同60教育-1430)</p> |
| <p>6 山口国体写真パネル</p> | <p>【山口国体写真パネル】</p> <p>*国体旗リレー(行政資料 写真 山口国体74)、皇太子・皇太子妃を待つ人々(同75)、競技場航空写真(久幸虎雄文書37)、旗選手サインコンクール(行政資料 写真 山口国体74)、秋祭国体記録(同181)、歓迎風景(同182)、国体栄誉風(同143)、鼓笛隊パレード(同224)、よこそいらっしやいました(同460)、民治の歓迎(同76)、開会式マスコット(同145)、旗リレーの通過を待つ人々(同44)、国体パレード(同33)、山口県陸上競技場建設工事(同4)、開会式(同90)、夏季大会マスコット(同32)</p> |

| | |
|---|---|
| 7 県政だより | <p>昭和24年12月の創刊号から昭和34年4月の122号まで発行されたボクスターです。毎月1回、6000部（昭和27年度までは4000部）が刷られ、県下一円、各自治会に配付され、県政の動きがわかりやすく伝えられました。毎号、瀬じみややさい絵と文字でデザインされ、県政の今が伝えられています。今回の展示では、山口県が、よい国体誘致に動き出す昭和26年前後の県政だよりを展示しています。</p> <p>*県政だより(行政資料)ボクスター-昭和25-1~5、昭和26-1-3-5-9-10)</p> |
| 8 県政ニュース | <p>テレビが一般家庭に普及する以前、映画が人々の娯楽の中心でした。映画館数、入館者数とも昭和33年にピークを迎えます。そのような時代、県政ニュース映画は、県政の実態を県民に効果的に伝える手段として、昭和27年11月に制作が開始されました。撮影はすべて県民会の職員が行い、編集・録音等は東京で読売映画社が委託制作し、県下の映画館で本編の前にニュース映画として上映されました。16ミリフィルム4本が同時にごリントされ、教育庁視聴覚メディアセンターを通じて各市町村及び公民団体等に無償で貸し出されました。毎回、3ないし4つの話題で構成されていますが、特に山口国体の直前には国体PRの一環として、毎回国体関係のニュースが取り上げられました。山口国体翌年の昭和39年に行われた東京オリンピックを契機にテレビはますます各家庭に普及し、それと反比例するように映画館の入館者数は減少しました。それに伴い、県政ニュースは昭和40年の第57号を最後にその役目を終えました。県政の今を県民に伝えるために作られた「県政ニュース」は、現在、当時の山口県の姿を私たちに伝えてくれる大変貴重な資料となっております。</p> |
| <p>第7回 ムーカイブスオンライン (平成24年度)</p> | <p>【展示タネ】 絵図と古文書で歩く萩往還</p> |
| <p>(展示趣旨説明) 近年、江戸時代の古い絵図を片手にした町歩きが人気を呼んでいます。また、現在開催中の「おいでませ！山口イヤー観光交流キャンペーン」でも、県内各所で古地図を片手にしたウォーキングが実施されるなど、街道と絵図に対する人々の興味や関心が高まっています。そこで今回のムーカイブス展示は、館蔵資料の中から、歴史の道「萩往還」に関する資料を紹介することといたしました。この機会に、実物の資料が持つ迫力に接していただき、ムーカイブス保存の重要性について理解を深めていただければ幸いです。</p> | <p>項目</p> <p>解説、資料名、請求番号</p> |
| 1 伊能図に描かれた萩往還 | <p>伊能忠敬が作成した「伊能図」(大日本沿海輿地全図)に萩往還がはつきりと描かれています。展示資料は、そのうち、萩・長門〜小郡・宇部地域のもので、萩往還の萩〜山口間が描かれています。本図は、萩藩が伊能家から入手した写本です。縮尺は36,000分の1(大図)です。</p> <p>*柳田国綱量絵図(伊能図)二番(毛利家文庫58絵図241(7の22))</p> |
| 2 萩往還のカラーガイドブックです！ | <p>「行程記」は、萩藩絵図方が作製した街道絵図で、萩〜江戸間の主要街道である萩往還、山陽道、東海道などが全23帖にまとめられています。街道を画面の中心に描え、沿線の集落や自然景観が色鮮やかに描かれ、地名や寺社、名勝旧跡の由来書も豊富で、江戸時代の街道沿線の様子を知る上で貴重な歴史資料です。萩往還・山陽道部分は、明和元年(1764)頃の作製とみられています。縮尺は7,800分の1です。</p> <p>*行程記 巻1ー(山口周辺)(毛利家文庫30地誌41(25の1))</p> |

| | |
|-----------------------------------|---|
| <p>3 もちろん、お殿様もお通りになります。</p> | <p>寛保2年(1742)に萩藩絵図方が作製した街道絵図「御国廻御行程記」にも、萩往還の防府・宮市周辺が描かれています。本図は、萩藩主の御国廻り(領内巡視)の道防を描いたもので、萩を出発し、防長の外縁を一周するおよそ120里の行程が、折本7帖にまとめられています。縮尺は5,600分の1です。 *御国廻御行程記 巻五(防府・宮市周辺)(毛利家文庫30地誌57(7)の5) *寺社旧記(毛利家文庫12社寺120)</p> |
| <p>4 なんと、街道沿線の寺社カポドツクもありです。</p> | <p>「御国廻御行程記」の別冊として作成されたものです。街道沿線の寺社の由来が記されています。絵図中の寺社に割り当てられた「いるは文字」と同じ、いろは文字を「寺社旧記」で見ると、その由来が詳しくわかる趣向になっています。 *寺社旧記(毛利家文庫12社寺120)</p> |
| <p>5 防長の街道ラックと区間です。</p> | <p>「大道小道井瀬道舟路之帳」は、慶安2年(1649)、萩藩が「正保国絵図」とともに幕府に提出したものです。江戸時代の街道を知る基本的な文書です。別名「道の帳」と言います。萩往還は、最上級の「大道」のラックであったことがわかります。※『山口県史 史料編 近世3』に収録されています。 *長門國周防國大道小道井瀬道舟路之帳(毛利家文庫59絵図238)</p> |
| <p>6 ここが萩往還の起終点「唐櫃礼場」だ！</p> | <p>幕府や藩の淀や通達などを記した高札場が置かれています。萩往還、赤間関街道、石州街道の起終点で、防長の一里山の多くには「萩唐櫃礼場より何里」と記されています。平成22年度に復元整備されています。国指定史跡。 *八江萩名所図面 巻五(松元享収集文書149)</p> |
| <p>7 萩往還をスッと描きました！</p> | <p>萩唐櫃礼場から宮市宿までの往還道をソングルに描いた絵図です。一里山や宿場、河川などがはつきりわかります。 *長門國阿武郡萩より周防國山陽道筋宮市宿往還図(毛利家文庫58絵図407)</p> |
| <p>8 道然つて、こんなにたくさん植えられていたんだ！！</p> | <p>江戸時代、軍用と旅人の道標とするため、街道の両側に数多くの道松が植えられました。例えば、萩往還の周防長門国境・板室峠〜山口・長野村だけでも、4,718本も植えられていたことが記録に見えます。現在、道松の大半は失われていますが、一筋の街道に沿って延々と道松が立ち並び景観は、とても印象的なものであったにはちがいないと思います。 *山口宰相道松絵図(県庁伝来旧簿記録889-5)、三田尻宰相道松絵図(県庁伝来旧簿記録889-4)</p> |
| <p>9 一里山の塚木の形は？</p> | <p>一里塚は、一里(約4km)ごとに建てられた、街道の距離を示す施設です。防長では、一里山とも呼ばれていました。一里山は、石や土で半球形に盛った塚の上に、四角柱の塚木を建てたもので、塚木には「従〇〇〇〇〇〇△△△里」のように、基点の地名と里程が記されています。 *三田尻宰相築石高塚目録(地下上甲379)</p> |

| | |
|---|--|
| <p>10 往還の管理ルール、ありました。</p> | <p>救済では、往還の道・橋・道松などの管理について、細かく取り決めていました。管理は基本的に村々の負担でしたが、普請や道松の植栽などがおろそかになることが多く、道をきちんと維持管理するのは、今も昔も容易ではありませんでした。 *續御書付二十八冊(道橋井道松修補の事)(毛利家文庫40法令159(2404))</p> |
| <p>11 古写真で見よう！ 救往還の面影。</p> | <p>明治〜大正時代の古写真に、江戸時代の救往還の面影を見ることが出来ます。 *山口・上野小段(図書720-58-20)、山口・香置山頂からの眺望(南村家文書398)、山口・豊石橋(図書720-58-57)、防府・佐波川の船橋(同720-58-32)、防府・防府天満宮(同720-58-28)、防府・三尻尾柳茶屋(同720-58-34)</p> |
| <p>12 救往還を、もつと知りたい方へ。</p> | <p>救往還を知る上で便利な本をいくつか紹介します。 *『歴史の道調査報告書 救往還』(山口県教育委員会、1981)、『絵図で見える防長の町と村』(山口県文書館、1989)、救ものがたり31集『絵図で見る救の街道〜救往還・石川街道・赤間関街道〜』(山田後著、2011)、街道の日本史43『長州と救街道』(小川園治編、吉川弘文館、2001)、『長州維新の道(下) 救往還』(図書出版のび工房、2011)、『歴史の道救往還ルートマップ』(山口県文化財愛護協議会、1989)</p> |
| <p>第8回 アーカイブズツアー (平成25年度)</p> | <p>【展示タトル】 山口県災害記 ～過去の記録に学ぶ～</p> |
| <p>(展示趣旨説明) 平成23年3月11日、東日本をかつて見たことのない地震や津波が襲いました。テレビや新聞などから刻々と流される情報に、心を痛めた方々も多かったと思います。しかし、当初「想定外」と言われた災害も、時が経つにつれて、古い記録の中に同規模の災害が記されていたことが分かってきました。「かつて山口県にも甚大な被害をもたらした災害があったが、今、忘れ去られようとしているのではないか。」にこのような危機感のもと、今回は山口県に甚大な被害をもたらした1950年代までの自然災害に関する記録について紹介します。</p> | <p>延宝4年(1676) 6月2日に起こった、山口県内で知られる最古の地震。「延宝見聞録」には、この地震により美祿郡嘉満庄堅田村(現美祿市秋芳町)においては土地が馬屋ごと陥没し、また庄屋の内庭にも井戸程度の穴が開いたと記されている。その後も1日に5〜6回、あるいは2〜3回の余震が6月中旬まで続き、7月9日、12月14日にも地震があったと記される。筆者である救済士野村勘兵衛哉房はその感想を「救初而七十余年二成待し共、今年/地震亦事也」(救入部以来70年が経つが、今年の地震は珍しいことだと記していること)から、毛利家救入部以来はじめての地震であったことをうかがわせる。津和野藩・福山藩の古文書にも地震に関する記述があり、中でも津和野藩では建物133軒が倒壊、城や川筋の石垣が崩壊するなど被害が大きかったことが知られる。 *延宝見聞録(県史編纂所史料104)</p> |
| <p>項目</p> | <p>解説、資料名、請求番号</p> |
| <p>1 地震 ①延宝4年地震</p> | <p>延宝4年(1676) 6月2日に起こった、山口県内で知られる最古の地震。「延宝見聞録」には、この地震により美祿郡嘉満庄堅田村(現美祿市秋芳町)においては土地が馬屋ごと陥没し、また庄屋の内庭にも井戸程度の穴が開いたと記されている。その後も1日に5〜6回、あるいは2〜3回の余震が6月中旬まで続き、7月9日、12月14日にも地震があったと記される。筆者である救済士野村勘兵衛哉房はその感想を「救初而七十余年二成待し共、今年/地震亦事也」(救入部以来70年が経つが、今年の地震は珍しいことだと記していること)から、毛利家救入部以来はじめての地震であったことをうかがわせる。津和野藩・福山藩の古文書にも地震に関する記述があり、中でも津和野藩では建物133軒が倒壊、城や川筋の石垣が崩壊するなど被害が大きかったことが知られる。 *延宝見聞録(県史編纂所史料104)</p> |

| | |
|-----------------------|--|
| <p>②貞享2年地震</p> | <p>貞享2年(1685)12月10日に起こった地震。「公儀ヨリ被仰出御書附」には、萩藩領内の被害状況が詳細に記されている。萩では、城の石垣が破損し、城下町でら崩れにあった器がこぼれ落ち、扉が倒れ、また家屋の柱が折れるなどの被害が出ている。中でも唐櫃地区では「道の中をゆりわり、泥出」と記され、液状化現象も起こっている。また大島郡外入村(現周防大島町外入)では、「山より石崩おち、けか仕候者大分有之」と、地震によって引き起こされた山崩れによって、多数の怪我人が出たことがわかる。なお、「逸史」(徳山毛利家文庫・逸史30)には、徳山藩内でも居敷の塀や墓石が倒れるなどの被害があったことが記されている。なお、広島藩、福山藩、岡山藩、津山藩、宇和島藩、土佐藩などの古文書にも記述があり、中国・四国地方全域が広く揺れた地震であったことがわかる。</p> <p>*公儀ヨリ被仰出御書附(毛利家文庫41公儀事34(2の1))</p> |
| <p>③宝永4年地震</p> | <p>宝永4年(1707)10月4日午後2時頃に起こった、遠州灘沖から四国沖までの広い範囲(南海トラフ)を震源域とした巨大地震。南海トラフの地震は100～150年に一度程度、繰り返し発生する巨大地震の典型例であるが、史料からある程度地震後がわかる5地震(明応・慶長・宝永・安政・昭和)の中でも最大規模であるとされる。またこの地震のおよそ1ヶ月半後(11月23日)に富士山が噴火したことも知られている。「公儀事務指図」によると、萩藩では10月4日の地震では特に被害はなかったが、24日後の10月28日に上徳地村(現山口市徳地)で地震が起こり、建物89軒が倒壊、死者3人などの被害が出ている。また「逸史」(徳山毛利家文庫・逸史49)によると徳山において10月4日の揺れと高潮(津波)被害は上方と比べそれぞれ「百歩一可為候」(100分の1程度)、「可為十歩一」(10分の1程度)と記されるなど、被害は比較的小なかつたようである。なお、28日の地震では、練壁が落ちる被害が確認できる。</p> <p>*公儀事務指図(毛利家文庫41公儀事5(80の4))</p> |
| <p>④安政大地震</p> | <p>嘉永7年(1854)11月4日午前10時頃、駿河湾、遠州灘、熊野灘の海底を震源域として推定M8.4の巨大地震が起こり、約30時間後の11月5日夕方4時頃にも、紀伊水道～四国沖の海底を震源域とする同規模の巨大地震が起こった。この年は天災が相次いだため、この地震を契機とし、11月27日に「安政」と改元された。今回の展示では、二つの地震を併せて「安政大地震」と呼ぶ。「美々婦久路」には、近畿以西の状況を報じた瓦版が綴じ込まれている。県内でも多くの被害が確認できる。「大地震報告書」は、地震発生後の11月6日から11日まで、各代官所から藩へ提出された状況報告書の経であり、各地の被害状況が記されている。萩城下でも被害があり、「密局日乗」や「御三靈様御事蹟編集掛日記」には、米屋町の町屋一軒が大きく西に傾き、清光寺の本門の片柱が30cm程度地中に沈んだと記される。また「御蔵本日記」には、都農郡東豊井村(現下松市東豊井)妙法寺で、地震により台所の屋根が塗壁に落ち、火事が起こったことが記される。</p> <p>*美々婦久路(毛利家文庫29説41)、大地震報告書(毛利家文庫9諸書617)、密局日乗(毛利家文庫19日記18(129の124)、御三靈様御事蹟編集掛日記(毛利家文庫19日記32)、御蔵本日記(徳山毛利家文庫1078)</p> |

| | |
|--|--|
| <p>⑤明治5年地震</p> | <p>明治5年(1872) 2月6日の夕方に発生した島根県浜田町沖を震源とするM7.0〜7.2の地震で「浜田地震」と呼ばれる。島根県を中心とする日本海沿岸地帯で死傷者は1,100人以上に上り、家屋の全半壊は焼失も含め1万件弱に及んだ。山口県においても「馬関支庁記録」(県庁戦前A総務74)に、豊浦郡横野村(現下関市横野町)の横野(人幡野)人幡屋が倒壊し、同郡彦島(人幡屋)の笠石が落ち、さらに同郡温大村(現下関市武久町) 豊福寺の門が大破するなど、被害が記録されている。また、山口県初代県令中野梧一(の)日記に、湯田温泉でラソブが壊れ、瓦が落ちたことが記され、また道場門前の商家安部家の「年中日誌」にも、瓦が落ちる被害が記されるなど、現在の山口市内でもかなりの揺れが確認できる。また、当時、寂にいた旧萩藩士内藤万里助の日記「内藤万里助後意宿公私日乗」からは、諸所にて被害があり、また16日まで余震が繰り返れていたことがわかる。</p> <p>*馬関支庁記録(県庁戦前A総務74)、年中日誌(安部家243)、内藤万里助後意宿公私日乗(毛利家文庫71藩臣日記17(9の8))</p> |
| <p>2 台風・高潮 ⑥承応2年台風</p> | <p>承応2年(163) 8月5日夜(新暦9月28日)に防長両国を襲った台風。「小箱日記抄」には、この台風による防長両国内の被害状況報告が含まれている。この記録から、台風により高潮が引き起こされ、死者106名、倒家11,220軒、死牛200匹など甚大な被害が出ていることがわかる。また、「無尺集」には支藩領域の被害内訳も記される。「公儀所日乗」には、隣国の安芸国においても8月6日に死者326名、広島城周囲の橋が全て落橋するなど、甚大な被害があったことが記される。</p> <p>*小箱日記抄(毛利家文庫9諸省14(4の2)、無尺集(毛利家文庫16番書40089の13)、公儀所日乗(毛利家文庫19日記4(360の34))</p> |
| <p>⑦文政11年台風</p> | <p>文政11年(1828) 8月9日(新暦9月17日)に北部九州〜防長両国を襲った台風。この台風は、オランダ商館付医師シーボルトが帰国する際に乗船予定であった船を座礁させ、この後にシーボルト事件が発生したことから、別名「シーボルト台風」「子年の大風」とも呼ばれる。その被害状況から、佐賀藩のみで死者が1万人を超え、過去300年間で最強の台風であったとされる。防長両国においても多大な被害があり、「公儀エ出ル御書附」から救済において、倒壊・流失家屋が10,933軒、104名の死者、348箇所(1)の崩壊所(土砂災害)が発生していることがわかる。また「草舎年表」には、一ノ坂上り南側で被害が大きき、山口宰判で5500軒余、小郡宰判で1,500軒余の家屋が被害を受け、山口では怪我人が20人程出て、即死者もあったと記されている。中でも下関では高潮による被害が大きかったと記される。この他にも「諸事小々之控」には、8月21〜23日にかけて萩の春日神社において二夜三日の風鎮五穀成脱の祈禱が行われ、また沿岸部の宰判では、多くの溺死人を追善するために施餓鬼供養などの仏事が行われたと記される。また、清末藩から萩藩に対し開作地の復旧のために、人夫1万人の助力を求める要請があったことがわかる。</p> <p>*公儀エ出ル御書附(毛利家文庫41公儀事27(12の8)、草舎年表(毛利家文庫17年表37(157)、諸事小々之控(毛利家文庫31小々控20(37の34))</p> |

| | |
|------------------------------|---|
| <p>⑧昭和17年周防藩台風</p> | <p>昭和17年(1942)8月27～28日に九州～近畿地方に被害をもたらした台風。死者・行方不明数1,158人の内、山口県のみで794名を数えるなど、県内の被害が突出して大きかった。「災害雑件」には、災害発生直後から昭和20年5月までの復興に関わる文書が綴じ込まれており、その中の「災害被害状況調」には夜8時に34.2mの風速が記録されたことを伝えている。「風水害状況」(県庁戦前A土木追加55)に綴じ込まれている「颱風被害状況速報」(山口県水産課作成)によると、「午後七時頃二至り風波猛烈ノ極々勢ヲ増シ、午後九時半乃至十時頃滿潮ニ至リ潮別二堤防防護岸ノ被覆シ海水ハ恐瀆ノ如ク内海一帯ノ漁村ニ浸入セルモノ如シ」と、猛烈な高潮の状況を伝えている。「災害一件」は、堤防崩落ノ被害ノ成ノ周防藩台風に係る一件書類。また「風水害一件」は復興本部にて編纂された文書であり、被害状況や復旧状況を刻々と伝える書類が綴じ込まれている。「災害一件録」は、大道村(現防府市)大道の夜場文書であり、この台風被害に大村役場がどのように対応したのかかわかる。昭和19年(1944)9月に、中央気象台がこの台風被害についてまとめた『秘密気象報告』では、戦時下において気象報道が規制されたため被害が拡大したとしている。</p> <p>*災害雑件(戦前戦後土木部496)、風水害状況(県庁戦前A土木追加55)、災害一件録(県庁戦前A警察44)、風水害一件(県庁戦前A土木追加57-58)、災害一件録(内田家文書249)</p> |
| <p>⑨ルーヌ台風</p> | <p>昭和26年(1951)10月14～15日に九州・中国地方を襲った台風。太平洋戦争後は気象業務が米軍の管理下に入ったため、「ルーヌ(Ruin)」という台風名も、米軍気象観測センターによるもの。この台風は14日夕刻に鹿児島県西部に上陸し、14日夜半に山口県中部を横断し、15日早朝に山陰を抜け北陸中に去った。山口県下では最大風速35m、県東部では13日～14日の総雨量が480mmに及び、1時間あたりの雨量が100mmに達する豪雨が降った。「山口県災異誌」。県下で特に被害を被ったのは錦川流域で、山崩れや出水が頻発した。北河内村(現岩国市)では、土砂崩れのために1集落がほぼ壊滅状態となり、この台風における県下の死者・行方不明者は405人にのぼった。この台風では、田中龍夫知事の出勤要請を受け、吉田茂首相の決裁という形で警察予備隊(自衛隊の前身)福岡第4管区隊の災害出動が初めて行われた。</p> <p>*「山口県災異誌」、昭和26年ルーヌ台風被害実況写真(行政資料 災害写真②)、ルーヌ台風大被害の実況(行政資料 ムービーフィルム801)</p> |
| <p>3 水害・土砂災害 ⑩戸田の大つえ</p> | <p>天保2年(1831)6月5日(新暦7月13日)に大島郡戸田村(現周防大島町戸田)を襲った土砂災害。「御当職所日記」には、6月10日に当職所(萩藩の民政を統括している部署)へ第一報がもたらされ、同27日に災害及び救助状況が報告されている。この日記によると、4日からの大雨により5日朝に山が崩落し、44軒が押し潰され、65名と牛9匹が生き埋めとなったことがわかっている。このため大島半島では、6日から10日まで5,800名もの入夫が救出活動にあたったが、30名・牛5匹の死体を発見することになった。その後、大島代官であった山縣四郎左衛門が陣頭指揮を執ったものの、牛1匹の死体を発見するのみで、結局23日に「最早残念無之ニ付専方差止具候」(もはや思い残すことは無い)ので、捜索を止めようとした。地元民の希望を受け、捜索を打ち切っている。「大島半島本誌」からは、この土砂災害により町6反1畝14束の田畑が埋没し、この復旧に延べ12,900人余の労力が必要と推計していることがわかる。</p> <p>*御当職所日記(毛利家文庫19日記22(178の104)、大島半島本誌(国史館文庫284))</p> |

| | |
|--------------------|---|
| | <p>天保11年(1840)6月4〜5日(新暦7月2〜3日)県内を襲った豪雨災害。天保7年、同8年にも水害が、さらに天保9年(1838)には飢饉が発生するなど災害が相次ぐ中、さらに追い打ちをかけるようにこの水害が発生した。「御当職所日記」には、この災害の際、当職所へ伝えられた領内各地の被害情報が記されている。これによると、特に佐波川沿いの徳地・三田尻幸判、榎野川沿いの山口・小郡幸判の被害が大きかったことがわかる。山口幸判では高瀬(現山口)で夜中の通行が困難となり、下柳柳井田川の土手が決壊したため人家が流失し、床上3〜5尺(90〜150cm)程度の浸水があったと記される。佐波川沿いではさらに被害が大きく、6月9日条に佐波川土手が決壊し「三田尻御開作を一面之洪水」と記され、佐波川上流の岸見村では、6月5日に幼子を背負った母が土砂崩れに巻き込まれ、現存する水損図から各地における土手根切(堤防決壊)の箇所、またそれに伴う水害(冠水)範囲なども判明する。また、佐波川河口の西ノ浦では浸水地域の水深が1丈6尺(約4.8m)にも及んだことがわかる。</p> <p>*御当職所日記(毛利家文庫19日記22(1780の127)、清日記(毛利家文庫7月藩日記2(620の10))、山口幸判榎野川水損所凡絵図(毛利家文庫58絵図329)、徳地幸判榎・伊賀地・岸見三ヶ村川筋水損図(毛利家文庫58絵図307)</p> |
| <p>⑩天保11年の水災</p> | <p>明治19年(1886)9月24日に大島郡東屋代村(現周防大島町屋代)で発生した土砂災害。9月20日頃から毎日豪雨が降り続き、屋代川支流久保川の上流部に形成された天然ダムが24日夕刻に決壊、土石流が発生し、60棟の家屋が流され、110人が死亡した。被災地の天野政一から土居村副戸長宛てに出された「大野政一書状」は、「郷之坪ノ如キヤ一村落而蕩尽セリ」「慈母ヲ失ヒ愛児ヲ遺ル等其惨状名状スヘカラス」と、この災害の悲惨さを伝えている。明治22年(1889)3月には災害を風化させないために、大島郡長が中心となり「罹災之碑」が建てられている。またこの災害の一ヶ月前前の8月末にも県内を豪雨が襲っており、明治19年(1886)9月8日付け防長新聞では、我珂郡長谷村で倒家25軒、死者9名、田畑宅地の6割が破損したと伝えている。「罹災窮民救助」の黒沢村外拾ヶ村戸長であった長峯公の進退向には、給与金(被災者に対する給付金)が下付されないならば「原野ニ餓死スルハ必然」と述べておられるなど、緊迫した状況が浮かがる。県は新聞広告で大島郡と我珂郡に對する義捐金を募った。この結果、総額138円50銭が集まり、二郡へ贈られている。</p> <p>*大野政一書状(武田家文書522)、罹災窮民救助(県庁職前入総務1543)</p> |
| <p>⑪昭和26年佐波川水害</p> | <p>近代に入っても佐波川はたびたび水害に見舞われた。大正7年(1918)7月11日の水害では新橋が流失、堤防各所が決壊して田畑家屋が浸水するなど甚大な被害をもたらした。さらに戦後、昭和26年(1951)7月8日から降り始めた雨は、9日から10日にかけて勢いを増し、佐波川の氾濫を引き起こし、沿岸諸村に甚大な被害をもたらした。同年7月20日現在の被害状況をまとめた「豪雨による被害状況」によると、当時の雨量は出雲村(現山口市徳地地区)において24時間で300mmを超え、死者は28名に及んでいる。「昭和26年大水害の実況」は、この水害による被災状況及び救済活動の様子を報じた貴重なニュース映像である。この災害により佐波川流域における治水への関心が高まり、昭和27年度から佐波川防災ダム工事が着手された。この工事は昭和28年度に、かんがい用水の補給及び防府市一円の工業用水電力確保を目的とする「佐波川総合開発事業」として、多目的ダム建設へと計画を変更し竣工した。「佐波川ダム概要」(行政資料)―フリップ(昭和37-21)はダム紹介のリーフレットであり、「昭和26年7月9、10日の異状出水に遭遇した」(本川上流に防災ダムを築造する)こととなったと、その経緯を記している。</p> <p>*豪雨による被害状況(行政資料50各図40)、昭和26年大水害の実況(行政資料ムビーフィルム803)、佐波川ダム概要(行政資料)―フリップ(昭和37-21)</p> |

第91回
アーカイブズイブニング
(平成26年度)

【展示タイトル】
美術とアーカイブズ ～古文書に見る防長の美術工芸品～

(展示趣旨説明)
雪舟・雲谷派の絵画や萩御土、本真を代表する優れた美術工芸品です。毛利家文庫をはじめとした県文書館所蔵の文書群には、これら美術工芸品のルーブリックや歴史を物語る文書が、数多く含まれています。今回は、萩藩士や寺社などが所蔵する美術工芸品の調査報告書「防長古器考」を中心に、江戸時代の美術工芸品の状況を紹介し、本真ゆかりの美術工芸品の歴史を振り返ります。この機会に、美術とアーカイブズの貴重な出会いを体験してみませんか。

項目

解説、資料名、請求番号

1 防長古器考

安永3年(1774)に完成した「防長古器考」1161冊は、萩藩が領内規模で行った美術工芸品調査の代表例です。調査対象は藩士・社寺を中心に210家に達します。多くは精密な図入りで大変美しく、一部は彩色も施されています。調査された美術工芸品の多くは現在では失われており、その意味で非常に意義深い美術工芸品調査報告書となっています。図は萩藩御用絵師雲谷等叔、編者は小笠原長鑑ほかです。

「防長古器考」の中でもっとも多く取り上げられているのが刀剣や甲冑などの武器・武具類で、そのほか、幟旗類も対象になっていきます。そうした幟旗類の中に、当館が現物を保管している例があります。「村上武吉過所旗」は、中世村上水軍の旗として有名なものです。「上」ど大書され、天正9年(1581)の年記および「武吉」の署名と花押があるこの旗は、「防長古器考」に図入りで「船駛小旗」として収録されています。また山内家文書5738に「古制旗」と称されるものが残されています。上部に三社と二天が書かれています。下部は損傷が著し、現在では文字の判別が困難です。しかし、「防長古器考」により、山内家の家紋「一」が描かれていることがわかります。

館蔵資料の中には、「防長古器考」とよく似た別の調査書も存在します。「御家来中古物之寛」と題書されるもので、毛利家文庫のほか、多賀社文庫と福尾猛市邸収集史料にもあり、江戸時代、古物愛好趣味が一定の拡がりを見せていたことがわかります。調査対象は40家で、うち34家が萩藩士で占められています。図には付随しない文章だけのものですが、記載項目の多くは「防長古器考」と重なっています。成立年代は「防長古器考」より一世代ぐい後のものと考えられ、ごく一部は「防長古器考」に載らないものも含まれています。

*防長古器考総目録ほか(防長古器考1ほか)、補正成徳(防長古器考7)、大内護親馬土俵(防長古器考77)、關之地紙武者繪(防長古器考24)、番録(防長古器考69)、村上武吉過所旗(村上家文書34)、村上武吉過所旗(船駛小旗之図)(防長古器考30)、山内家伝指物(古制旗)(山内家別箱一573)、山内家伝指物(古制旗之図)(防長古器考16)、御家来中古物之寛(毛利家文庫16巻45)、多賀社文庫323、福尾猛市邸収集史料12

2 防長風土注進案

地誌として名高い「防長風土注進案」にも、美術工芸品の図が掲載されている場合があります。例えば、正八幡宮(山口市)の能面12面(山口県指定有形文化財・県立山口博物館寄託)や赤穂義士の頭巾などです。

前者は、「文明」「延徳」という15世紀後半期の年記銘や作者銘が記されており、地方作の能面として貴重な美術工芸品です。後者は、由来は不明ながら、当時山口町人の安部家に伝来していたものです。

*能面(風土注進案268)、赤穂義士の頭巾(風土注進案255)、頭巾(唐人モウ)(防長古器考38)

| | |
|--|---|
| <p>3 美術よもやま話 (その1) 雪舟筆「山水長巻」模写</p> | <p>毛利博物館(防府市)には、国宝として有名な雪舟筆「紙本墨画淡彩四季山水図」(「山水長巻」)とともに、その模写本が所蔵されています。ひとつは、国史院指定で萩藩御用絵師雲谷等(1547-1618)筆と伝えられているもの、もうひとつは享保10年(1725)、幕府御用絵師狩野古信(栄三川、1696-1737)が模写したものです。古信の模写本は、落款まで写し取られた見事な出来栄です。この模写本は、大正5年(1916)12月、現萩市出身で日製製作所の創設者、政友会総裁も務めた久原房之助(1869-1965)から毛利家へ毛利邸の新築祝いとして献上されました。 「公儀事諸控」には、古信筆「山水長巻」模写本が作成された様子が詳しく記されています。 享保9年(1724)、8代将軍吉宗は、狩野古信に命じて諸大名が所持する「古き絵」を模写させました。萩藩もいずれ指図があるものと予想し、事前に古信へ問い合わせるなどして情報収集に努め、所蔵する古い絵画を江戸藩邸に運び込んでいました。しかし、「山水長巻」だけは秘蔵の宝物として萩に残してしまいました。しかし、翌年4月、「山水長巻」も江戸に取り寄せると命ぜられ、急遽、運搬されることになり、安全を期して萩からさすて陸路が使われました。 江戸藩邸に搬入された「山水長巻」は、「大切之物」として日々萩藩士が古信宅へ持ち運び、11月3日から24日まで模写作業が行われました。完成した25日、古信自身が萩藩邸へ完成のあいさつに行き、自身の模写本を披露して帰りました。将軍吉宗も出来栄を大いに気に入り、古信に奥書を書かせ褒奨もさせていただきます。翌年5月、「山水長巻」は再び特別便で萩へと戻されました。 *公儀事諸控(41公儀事(37の16))・雪舟筆「山水長巻」※複製(繪物類9)</p> |
| <p>3 美術よもやま話 (その2) 老中松平定信の「平家物語」写本懸望</p> | <p>寛政の改革で名高い、幕府老中松平定信(1758〜1829)は、諸大名に名筆・尊筆の古額や什物の古書類を提出させるなど、古物趣味を持つ大変な文化人でした。「諸事少々控(のなか)」に、この文化人としての定信に関するエピソードが記されています。定信が、下関の赤間神宮(当時長岡弥陀寺)に伝わる「平家物語」20冊(現在重要文化財)の写本を懸望し、寛政6年(1794)年7月に進呈させたといわれています。萩城内で写本作業を行ったのは、三田尻中船頭の古武多熊という人物です。彼の経歴については、詳しいことはわかりませんが、 *諸事少々控(毛利家文庫31小々控1774の28))・寶暦日記(寛政5年12月8日)(19日記18(129の35))</p> |
| <p>3 美術よもやま話 (その3) 萩藩のルーツを考える(新出史料)</p> | <p>萩藩(松本藩)発祥からまだ間もない、寛永元年(1624)頃のようすを伝える興味深い書状が、毛利家文庫に残っています。そこには、焼物師一人の名付けに、毛利臈元(宗頼)とその嫡男で初代萩藩主秀政、および長府藩主毛利秀元が関わっていたこと、また、焼物師が「異国人」であることが明記されています。「御留守居所日記」天和2年(1682)10月2日の条には、松本藩では萩・毛利家の御用だけではなく、一門や吉川家、長府毛利家の御用も同時に果たしていたことが記されています。 *伊秩采女正書状(松本藩の事)(毛利家文庫 運用物近世前期441)、御留守居所日記(天和2年10月2日)(同19日記7(22の9))</p> |

| | |
|--|---|
| <p>3 美術よもやま話 (その4) 下松多聞院「星宿図」 開帳の記録</p> | <p>下松市の多聞院が所蔵する「星宿図(寺伝須弥山図)」(山口県指定有形文化財)は、用途がはっきりしない謎の美術工芸品です。高さ約50cmの五段組立造り円筒形で上4段は回転でき、各段に十二宮や二十八宿などが描かれています。江戸時代、凶作悪年がうち続く延享3年(1746)寅年に、五穀豊穡を祈念して星宿図を開帳(一般公開)したところ、讀作に恵まれたため、このあと寅年ごとに開帳するようになったというエピソードが、徳山毛利家文庫「御蔵本日記」に記されています。</p> <p>*御蔵本日記(宝暦8年2月6日) 徳山毛利家文庫 御蔵本日記438)</p> |
| <p>4 現代の美術工芸品 調査</p> | <p>美術工芸品の調査は現代も行われています。県教育委員会は、萩藩主毛利家・徳山藩主毛利家・岩国藩主吉川家・萩藩水代家老益田家・周防国分寺などの所蔵先ごとに、また、石造物・絵馬・中世文書などテーマごとに調査を実施し、その成果を報告書にまとめるとともに、文化財指定を図るなど文化財愛護普及の役割を担ってきています。</p> <p>*毛利家歴史資料目録ほか(図書028Y001ほか)</p> |
| <p>5 文書館所蔵の絵画 資料</p> | <p>徳山生まれの大庭学庵(1820-1899)は、徳山藩御用絵師朝倉震陵(1798-1871)に師事し、のち萩藩御用絵師小田海庵(1784-1862)の門を叩いた絵師で、山水花鳥画を得意としました。当館に彼の自画像などが残されています。</p> <p>「四季耕作図屏風」は8曲1双の大作で、長府藩御用絵師恒山養意の作品です。山口の町人安部家に伝わったもので、天保6年(1835)同家の道真庵にも記載されています。この屏風は、毎年正月、地主まつりの際に飾ったものといわれています。いざいざした庶民描写が魅力的です。京都北方にある鞍馬寺(鞍馬蓋寺)の縁起を絵巻形式であらわしたのが「鞍馬蓋寺縁起絵巻」です。原本は火災で焼失してしまいました。江戸時代の模本が清末藩主であった清末毛利家に残り、現在、当館所蔵の清末毛利家文書として伝えています。なお、清末毛利家文書には同様の模本類が他にも数多く伝えています。</p> <p>*大庭学庵自画像(軸物類91)、四季耕作図屏風(安部家文書1526)、天保六年夏虫干詣道具控(安部家文書997)、鞍馬蓋寺縁起絵巻(清末毛利家文書302)</p> |